

5 竜宮伝説

深港から約5km沖で、向島（燃島）との間に「竜宮」があったとされています。干潮時には水深5～10mもない大きく広い浅瀬があり、大きい船では座礁することもあります。そのため、「島があってもおかしくない」とされ、この島にあった神社が海中に沈み、飯牟礼神社に御神体をうつしたともいわれています。鳥居や石段があり、波で壊れて次第に沈んでいったという話もあり、海面が澄んでいるときには、石段の一部が見えることがあるといわれています。

6 神様の浜下り

毎月23日は、「神様が浜を下る日」といわれ、神社から海岸までの家庭では犬を飼ってはいけないという言い伝えがあり、近年まで犬は飼われていなかったそうです。

7 鬼火焚きの由来

正月行事として行われている「鬼火焚き」。これは、宮中で正月15日と18日に「吉書を焼く儀式」に由来しています。宮中の正式な方法では、青竹を束ねて立て、毬打3個を結び、これに扇子や短冊、吉書などを添え、謡いはやしつつ焼きます。民間では、長い竹数本を立て、正月の門松やしめ飾り、書初めなどを持ち寄って焼きます。この火で焼いた餅を食べることで、一年間の病が避けられると信じられています。

2 火の神講（ひのかんこ）

火災を招くとされた猿が出てきたときは、「猿がお出でになられた」といいながら、地域内の各所で米や銭、食べ物などを持ち寄り、一緒に食べながら集まり、火災に注意を配っていたといわれています。

3 地名の由来

昔、境小学校がある場所には下宮神社が鎮座し、すぐそこまで海が迫っていました。その場所は入り江になっていて、葦が生えていたことから、「上芦戸」や「下芦戸」などの地名がついたといわれています。また、「松尾」は古くは「新堀」と呼ばれていました。松尾は、昔から水が豊富だったため、江戸時代から島津藩の軍馬を放牧していた場所で、馬が逃げないように堀をめぐらしていたことから「新堀」と呼ばれ、時が流れて放牧場の管理者の姓から現在の松尾と呼ばれるようになりました。

4 蛭子神社（ひるこじんじゃ）

蛭子神社は、中園地区の小川沿いで、「しずんどん」と呼ばれ、大木の下にあったとされています。現在は石塔だけが残っていて、老神神社に合祀されています。蛭子神は、伊邪那岐尊と伊邪那美尊より生まれましたが、骨がないために葦の葉船で海に流され、海の神様「えびす様」になられたともいわれています。

1 老神神社 （おいがみじんじゃ）

天孫（天照大神の子孫であるニニギノミコトのこと）が、天の国より降りた際に、この国の道案内の先導役をした「道開きの神様」である猿田彦命をお祀りする神社です。境は昔から多くの火災の見舞われることがありました。ご祭神の名前に「猿」がつくからか、猿が出てくる時には、必ず火事が起こるといわれたそうです。

